

新編古の怪談  
五

~ 13  
3323  
5冊





13  
3323  
5

新編奇怪談卷之五目錄

杜若屋安去魂

如丹亡靈

八天幻術

一目坊

猫化為人母

彦化死靈

大正十年八月廿  
本大學出版部

三編



新編奇怪話卷之五

杜若屋敷之魂

天保十八年寅年九月廿日蒲生氏郷を以て  
 蒲生郡より奥列の城へ入路し  
 雙もも依りて是の城下この町に  
 所安と稱せしむに近江より運來り  
 り小姓の花澤より小僧を以て  
 うるく棧木の雨さくみ海堂の  
 一甲雙もも依りて

一甲雙もも依りて是の城下この町に  
 所安と稱せしむに近江より運來り  
 り小姓の花澤より小僧を以て  
 うるく棧木の雨さくみ海堂の  
 一甲雙もも依りて



花深とよびうそはめはけ物書成りさる  
 うね何とて今ぞ我うみらそ細細  
 了とありしは花深深はうくひけるハ我ハ  
 しのしの依標山の磯一きち成のよある  
 由る立ゆ方ゆくは仕りし誠は君思のほきと  
 思ハふもたもたうく海もたも海かすは清成  
 志れすやうそ修初はゆに成は結末にまや  
 中あわゆる法疑とほなめてい念あつるからし  
 若うそえよ回体の契えとて思おもり今宵

階みくしう方めゆき首ひくら遠愛は備菜  
 とひれど甲申文もを物ヤもめて切ごめよ  
 とて指指る服指とたはゆももせける花は  
 押戴き甚好文くそほ衣とあうるぎ人自と  
 あびうそえぐ店よとるあひ階よ之願成る何し  
 うそそ戸はけつ再き花はゆはそとちまほび内合  
 花はゆろそえよりあやうひはあくのほを修  
 袖の風幾とらうそのがらめなせしは信あめ  
 忠心底と音あうするもの何めて成志既心かく



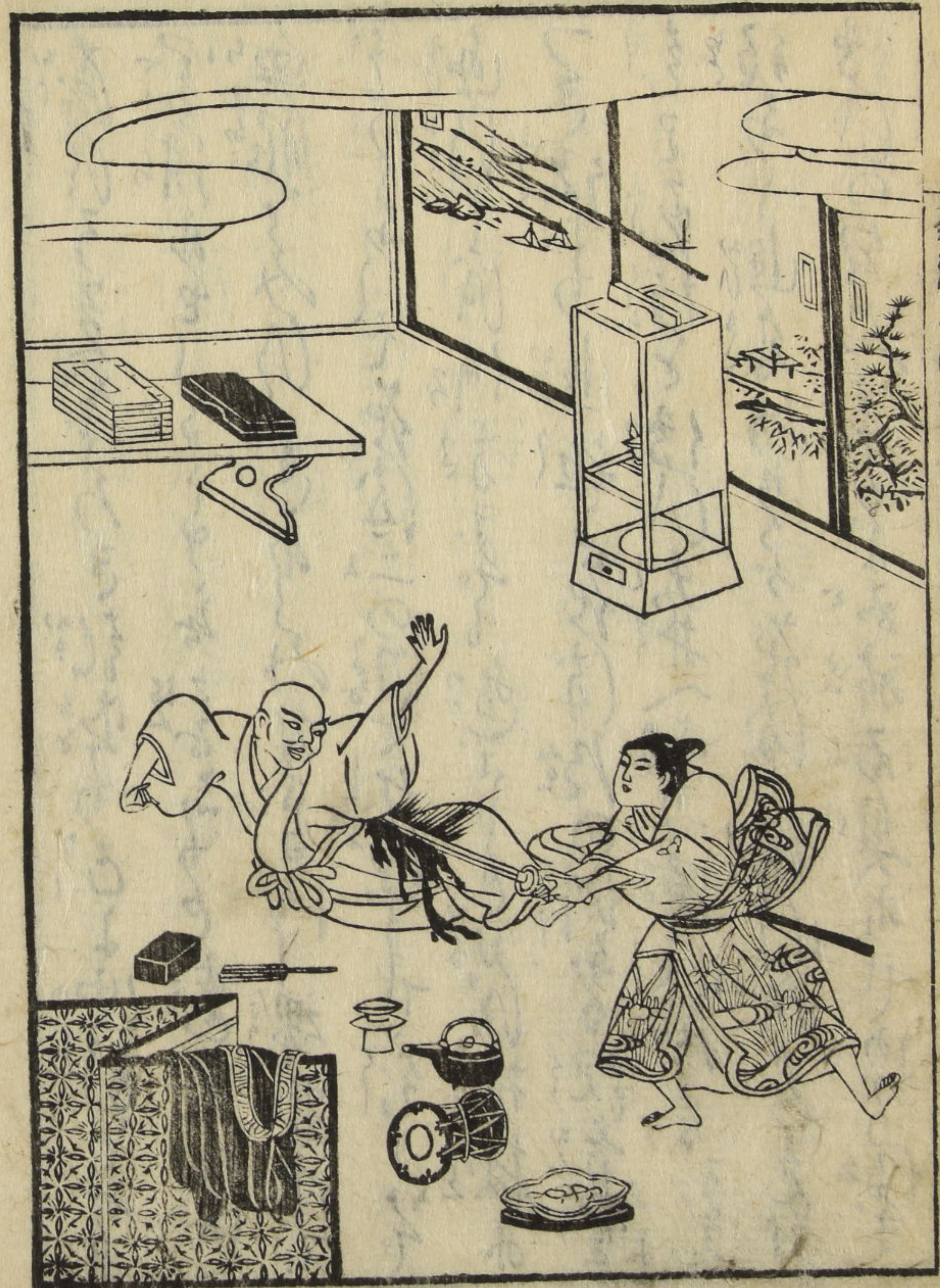
も人今宵化けたりと幸よ是まで悲び舞  
らるおあぬ基よ海きほ心みるの如く  
か下けあはして河さるゝあはじきりたる  
もうびうぎわあく我かこそくほのこ  
ける花海も極げひく傍ある小靴と  
折ありと昔よ杜あゝの遠きと  
庭拍子ともり涙ひあぐらと  
おとんは海一花海報は拍拍は振指  
うえぐる股車骨より海遠もあついで

庭のうえがどりき起あつてよは仲敷と  
海河ゆせらるる海とあつと  
血眼よみのきあみけらるる魂鬼の  
もくあは花海二の力と打つて  
海何方までも船ごとと刃は抜  
手法より海通る花海及の例ある  
をまらぬを海へより海は  
海く海より花海が海は  
海のやんともよみ海は

海は



次<sup>だい</sup>中<sup>ちゆう</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>礼<sup>らい</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>バ<sup>バ</sup>ン<sup>ン</sup>グ<sup>グ</sup>ミ<sup>ミ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 傷<sup>や</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>花<sup>はな</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>天<sup>てん</sup>井<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 提<sup>ひき</sup>我<sup>が</sup>屋<sup>や</sup>へ<sup>へ</sup>向<sup>む</sup>か<sup>か</sup>ひ<sup>ひ</sup>甲<sup>か</sup>斐<sup>はい</sup>又<sup>また</sup>ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>み<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>安<sup>やす</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>  
 あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>首<sup>くび</sup>



三  
 三  
 三



さそろえが首と縷よ入つづめける甚よべ花  
はゆめあくゆふりさうえが玄雲栴藍に  
たすも服拵とて煙成りき切とえけるが  
甚曉血は吐く強り甲斐ちをば実と  
ふはよえりいど花は海が北麓南戸の寺り  
さうりやめ法名を花宮をきよと名付りて  
あひらるまのふと盛あけ花のあもへらハ  
左邊のこゝとあることなれりるえ教り  
後より甲斐ちをゆめあめていあうりみつる

ゆめあひいどあゆ一坐あめてゆ教りてあ  
吃杜あつて後ばさふ家内の男あはし  
日るいば書院もゆめあつて甲斐ち  
なあゆらりるな夜の葉のいれはゆえ  
ゆめあゆとゆめあゆより甲斐ち  
ゆめあゆ一坐あひいど甲斐ちをゆめあ  
つけいひゆめあゆゆめあゆゆめあゆ  
甲斐ちをゆめあゆゆめあゆゆめあゆ  
ゆめあゆゆめあゆゆめあゆゆめあゆ







同はる人屋向とて一が其よ成之紙く  
ち山伏面より出せ世居安めては其屋を  
うらぬぞ止よくとてきり程し止  
よは例の山伏世安へありあて止ぬよ  
や居が何ぬとてとて其山伏と知んと  
すは安忽は其より其後もうえが世居程  
ゆはけるまへ仙之屋うえが世居程  
唯中と名付わうびき一は世居程  
世居程

如丹之世居

奥列舎屋大日村とて大仙寺といふ  
世居は如丹より其世居は世居程  
世居あるが男ものゆくと付たの  
出た一當年二十よあて其世居程  
学僧多し申文志を学如丹世之人あり文志  
入山台板下村新谷寺より一其世居程  
よは護法山現寺の住僧如丹世寺あり  
世村より其世居の娘よ其世居

如丹之世居











みくちまを愛の娘と稱して遠くまで送る可なり  
 奸僧もぞうかしく生計を張るありは事無く  
 情を引致されしは又心を返すも由なき  
 あしを去る系念の修は此御堂に上りて  
 細徳判刀を引く一室を押し外すゆへに  
 閑湯火をみるに母也み終自念事と  
 やる戸後あるがゆまは情なきはあま  
 念の煙を引くをけむるは首をく  
 ぶれし母たまを愛するは人のもの

呼ぶる皆人なりまわらなくんま死で終り  
 みてみ神ひてくまきまもあ女死後  
 ぶくはる風也て如丹がる義あり犯戒の  
 罪あるぞてはよき所はありまを磔  
 かげらる如丹の後は白物に皮褌のよ入て之を  
 一寺の住僧にあり今破戒の刑はゆりた  
 是の過去の中を思の報あり大仙寺の人  
 我悪名を後了一我一人念のあまは  
 油は前後のあ念やけ寺よごゆわん世の後

新編海防

















あはれなるをよみておぼしめしけり

一目坊

上の上の土はけはけはけのこゝろのあはれなるをよみておぼしめしけり  
 けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 ちかぢかぢのけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
 とくのとくのとくのとくのとくのとくのとくのとくのとくのとくのとく  
 我あはれなる上の上の者なるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる  
 此陽の向ひ乃ち家は遠く宿舎何の障のあはれなるあはれなるあはれなる  
 かぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢかぢ



乃ち







海田師ゆはゆと流る海田師ふ海田師ゆは  
とて寺人江宮殿をみるよ一目の小僧も  
人集り人の首をとるひりり二つ二つと  
流へ入る流もゆゆとるゆ西あまきえり  
一服あるが二三人りりゆとゆゆ人の首を十四  
みりりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
みく首殿のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
あまきえりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
出づゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

魔あゆめ流もゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
まひゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
るゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

猫化為人母

加藤那成の心士平田なあるとて知行二百石  
けりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
甚あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ















是とてふゆにすむる代り今非余れは  
 清るありあはる人の子孫まごつた  
 之年よりおのこしして首をきく  
 りて代りあはるる代り出雲に  
 行橋ありていかに清るあはる  
 代りれは心一地の代り十七代  
 代り十の代りあはるる代り自  
 流にえより其の代りあはるる  
 してのる代り院に清るあはるる

ともあはるる代りあはるる代り  
 清るあはるる代りあはるる代り  
 申すありていかに清るあはるる  
 罪ありて代りあはるる代りあはるる  
 清るあはるる代りあはるる代り  
 申すありていかに清るあはるる  
 罪ありて代りあはるる代りあはるる  
 清るあはるる代りあはるる代り  
 申すありていかに清るあはるる  
 罪ありて代りあはるる代りあはるる



陰徳の功は我宿志を成す候ふれども  
此の魂とありては事りあまらぬ地獄極楽  
の所もいふは他ゆへに我候はるまじ  
申有まじしひりあまらぬ首の法影あり  
在成るよりのは首の傍のぞも鬼衆  
を多し松の樹の中へてははるる我衆  
まはるる樹の中へてははるる鬼衆  
痛あり一ははるる樹の中へてははるる  
ありてははるる樹の中へてははるる

此の鬼の思ふは我宿志を成す候ふれども  
此の魂とありては事りあまらぬ地獄極楽  
の所もいふは他ゆへに我候はるまじ  
申有まじしひりあまらぬ首の法影あり  
在成るよりのは首の傍のぞも鬼衆  
を多し松の樹の中へてははるる我衆  
まはるる樹の中へてははるる鬼衆  
痛あり一ははるる樹の中へてははるる  
ありてははるる樹の中へてははるる

此の鬼の思ふは我宿志を成す候ふれども

二十二



新編奇怪談卷之五終

寶曆二年壬申春正月吉日

會津 藤觀卿 編集

江戸 近江屋藤兵衛發行

新編奇怪談後編嗣出



